



Eld: Kou MUKAI
2-12-2, ASAHIMACHI, ABENO, OSAKA

5. Jun. '84 No. 280.

イオム通信
大阪府あべの区旭町2-12-2.
何井 専

報告

忽然として消えた



昨夜は、尾行を心配してたので、つぜん走り込むような訪ね方をしてみません。あれから、帰ってすぐ、云われた通り、この(記録)を書きました。
★印は、あとで考えたことなどの補注のつもりです。

① 1月31日午前11時30分ごろ、平野区西藤一丁目、国道ぞい昭和石油スタンド前を自転車で来かけたところ、路上に、三人の男が立っていた。

▼と、一人がバツと手をひろげて立ちふさがり、一人はハンドル、一人は荷台を押さえてとりかこんだ。

- 「スズキやな」
- 「ちよっと署まできてくれるか」
- 「おまえ、東アジア反日武装戦線」のメンバーやろ。判ってるぞ」
- 「ちがう云うなら、署へきて説明したらエエやろが」
- 「家族おどろかしたら気の毒やーおもしろい」
- 「道ばたの、立ち話しぐらいで、済むことやないでエ」
- 「いやや、で通るか。そんなこと判ってるやろ」
- 「さ、いい」

★のっけに「東アジア反日武装戦線のメンバー」と云われて、まったく動揺。声が出ず、もうしどろもどろ。気がついて、近くに駐っていた車の中に押し込まれていた。

★いまになって考えると、「ちがう、ちがう」という私の悲鳴、あるいは抗弁こそ、やつらが待ちかまえていた(回答)だったのだ。なにがいない!

なぜならそれは第一に、東アジア反日武装戦線と私の間に「ほんの僅かであれ存在する」一つの関係を、私自身によって否定させ、分断した、ということだった。

第二に「私がいままでもやってきたことをあわてて抹殺し、今後は自己規制する」という、転向を意味していた。
★第三に「ちがう」「関係あらへん」という私の弁明は、それから限りなくつづいて私への質問をつくり出すものだった。云

▼5月25日、六ヶエ、八ヶエと別れて、大山へ。大山では隣家のクマが、場所を定めて、雨ざらしの木の根っこに、つがれて、ぼくをまわっていた。(石塚に「ぼくをまわって、ぼくをつつて、その下にダンボールと板で、ぼくをつくつて、つたけど」)

▼十坪ほどの小さい庭の、スズランの群生は、たいてい青い葉。散らばって、青い葉の茂りばかり、それを「山みどり」が、ぼくをまわっていた。

▼五年、八ヶエ梅かと思いついた梅の木は、庭のど真ん中にひろがった。青葉のかけは、梅のようになり、実を、樹の下で、つたけど。

いかえると、関係がないという「あかし」のため、やつらの訊問に積極的な答える以外、のがれられない立場、心理に、私が追いかまれる—ということだった。
第四には、このようにして、やつらは私をどうにでもできる—(ねごとをねずみ)の—関係をたちまち完全に手中に収めたのだ。それが私の「ちがう、ちがう」がもたらすもの意味だった。

★もしそのとき、私が「ヘエー、メンバー—う。そら光栄なゴカイや。どんな根拠で?」とか、「死刑廃止の運動やってたら、メンバー云われるんか」など、ちがう対応をしていたら、彼らの優位性は、多少変わったにちがいない。

★すくなくとも対等の立場で、「そんなに親切やたら家へきてんか」「家族や近所の人にも、聞いてもらいたいよって」「任意同行やたら、きっぱりお断りや」「合状まずみせてんか」「これ往來の妨害やで。道交法の違反や」ぐらいねばれて!署までいかずにすんだかも。

★家族に知られたくない!と思った瞬間から、それは自分の大きな(弱味)となつた。もし「何も後暗いことしてへん、知られてもかめへんよ。のぞむところや」と言つてたら、立場は逆転した。つまり、それは権力の不当なやり方が公開されることであり、あべこべに私にとっての武器となることだった。

★ともかく連行されてしまふか、されなしか。この第一ラウンドが決定的勝負で、同行したらいざ、このときでもう70%敗けだった。

② 平野警察署では、三階の、誰もいない大部屋の長机の前に、約二時間の訊問。ガラス窓いっぱい目に射して、何もない部屋が、そう明るく、寒く、ガラんとしていた。

▼「名前を名乗ってくれへん限り、一切答へへん」云々とたん、急に寒さで、歯がガチガチ鳴るのが判った。ガラにない強がりは弱味をつくる以外でないものだった。

▼背が高く角刈りの、自称29才の男が、石油ストーブをはこんできて、「ま、あたれや」といった。40才ぐらいの、中肉中背、特徴のない方は、眼鏡をふきながら、ふと顔をあげてあっけないほどあっさり「わし、カメラマ

や」と名乗った。
20才すぎの若い男は、署につくとすぐ消えて、帰るまで姿を現わさなかった。

▼カメラマに名乗られて、黙り込むわけにいかんハメになった。「完全黙秘」は、かえって疑われそう。『潔白やから平気や』というフリをするためにも、何かしゃべらずにおれなかった。

▼不当な連行に抗議すると、「ファン、ファンに軽くうけ流して、何の反応もない。いつまでも黙って眼鏡のレンズをふいている。何も云うことがなくなった。「ああ、もうアカんのか」。土田日石ピース作事件のデッチアゲを思い出して、絶望的になったところで、カメラマが向き直って、眼鏡をかけた。それからつぜん私をのぞき込むようにして、ニカールと笑った。何の意味か、どきどきしながら、それでも何となくほっ、とした。

●「よっしゃア。よう判った。そやけど、きみ、九月五日のハラハラ大集会」にいったるやろ」

●「その前の、準備会にも出とったなあ」

●「ハラハラグループに、いつごろから関係してんや」

●「どんなきつかけから...」

●「その呼びかけは、誰から...」

●「ムカイとちがうか」

●「ムカイが、なんできみの住所知るとるねん」

●「死刑廃止講演会の記名で、いつの?」

●「桜宮公会堂やたら...二月やな。寒いしエライ雨でびしょびしょになるし、よう覚えとるで」

●「ハラハラ準備会に、何回ぐらい出た?」

●「エエかげんなこといたらアカン。互回やろ」

●「準備会はいつも何人ぐらい...」

●「多いときで何人や」

●「つゆくさ小屋一ぱいで、何人はいるねん」

●「誰が行ってもエエんか」

●「準備会はムカイのほか、誰々や」

●「ほら、シンガ、短髪で丸顔の、ちよつと太ってる、あれ何ちゅうたかな」

●「ムカイとこへ、しよっ中きてる女の子、度につよいメガネで、髪は三つ編みの...」

●「西成(カマガサキ)からも来とるのがおるやろ」

●「京都からくる、よう太った中年の...知らんか」

●「それで、誰がいつも司会をしとるねん」

●「ムカイとちがう誰や」

●「名前しらんでも、特徴は云えるやろ」

●「つゆくさの掃子、十人ぐらいで、いつもどこかよつとるなア」

●「ほう、君は酒のまへんのか。そやけど、松崎屋へ一しよに入ってるやないか」

●「どんな話するねん」

●「誰が勘定払うねん」

●「割勘?ムカイが出せへんのか」

●「ムカイの家は知ってるか」

●「何へんも訪ねてる筈やで」

●「上か、下か」

●「上ちゅうのは、崖の石段があがったアパートのこっちゃ。下は、ウリの看板札がさがつとるやろ」

●「ムカイとこでめしたべたか」

●「何回ぐらい」

●「めしるとき、タイコたたくやろ、それ以外で、たつき方がちがうのは、何の合図や」

●「ムカイはいつも家で何しとるねん」

★判ってるクセに、しつこく(名前)を

云わせようとした。それでどうどう六人の名を肯定してしまった。いまになって、それは調べたことの正否を確認するためやな、と気付いた。

★ たとは「司会は誰か」という質問に黙ってたり、「名前は知らん」というと、「そうか、君がやってるのやな」とカブセてくる。集会の人数や回数など、あいまいに少なく云うと、必ず大きい数字を出す。そして「判ってるのや、きみがどれだけ正直に云う気があるか、きいてみただけや」と、ハッタリをうつ。結局、大体のところがつかまれてしまった。つまりカメラヤマが数字を何度も出し、それをこちらが肯定させられるという破目に追い込まれた。

★ 「なんでそんな関係ないことまで、答えなアカンのか」ときいても、まともな返事は、一切かえってこない。カメラヤマは、中指と人差し指の二本で挟んだ鉛筆をよって、軽く机をコンコンならしながらじっとあらぬ方を向いている。そのコンコンいう音がやむと、とつせん、こちらの眼をのぞきこんで、ニカーツと笑う。コンコンは、こっちが云うことの無視、そして答の催促で、「気にせんと」と思いながらイライラする。ついついカメラヤマの手口に釣り込まれた。

★ 警察に連れ込まれたあとの勝負。第二ラウンドは、一切だまりこんで黙秘を貫くか、どうか。ひと言でもしゃべり出したらもう95%の負け。そしてのこり5%の勝負は、たとえは、「そんな無関係のことには答えない」「友人に迷惑がかかるかもしれないことについては一切言うつもりはない」と部分的、限定的に黙秘を宣言することができるか、どうかにある。

③

- 「それでな、きみ、どんな考えで、ハラハラ、に闘わってるねん」
- 「四つの立場の、どれや」
- 「東アジア反日武装戦線に連帯し、あるいは異同を超えて支持支援し、または死刑重刑攻撃に反対し、その他野次馬でも何でもともかく関心をよせる者、みんなの大連合！ いうんが、ハラハラやろ」
- 「死刑廃止の立場以外のものは、どない云うとるねん」
- 「判らんことないやろ」
- 「これハラハラ集会が配ったシンポジウムの資料や。①の立場から」にこんなことが書いてある…

- 「連帯する、云うのは、ま、爆弾闘争に自分も続く、いう立場やろ」
- 「ようやらんにしても、心情としては、やりたないやろ」
- 「三菱のやり方がまずかったらどういことや」
- 「死傷者が出たという、自己批判、誰がしとるねん」
- 「しかし、建物だけやったら、かめへんのやな」
- 「合法的に、て、どんな」
- 「ま、エエワ…」
- 「大阪の三井物産ビルなア、あの爆破は知ってるか」
- 「なんで知ったんや」
- 「ラジオの連報やとこで」
- 「勉強教えてたて？」
- 「アルバイトやってるねんや」
- 「どこまできみの姉さん、どこにつとめて

はるねん」

- 「三井物産やろ」
- 「いや、な、ただ念のためにきいただけやんか」
- 「東急観光のときは、どうしててん」
- 「あれは、何グループがやったかいな」
- 「東アジア反日武装戦線のメンバーの名前知ってるか」
- 「一応きみの口からききたいんや」
- 「もっとおるやろ。四人だけやなしに」
- 「それから、」
- 「いま、逃げてるヤツ…」
- 「そんなに興奮せんでもエエがな、よっしや。スズキ君は、つまり死刑廃止の立場で闘わってる、いうことやな」

④

▼ 自称29才が、紙袋をもってきてカメラヤマの前におくと、そのまま立去った。

「遺棄拾得…」封筒の表記がちらっとみえた。カメラヤマは、それに全く関心がないうちに、横においたままふれもしない。

- 「もうちょっとで終りにしよか、そしたらすぐ帰ってもらうさかい」
- 「スズキ君の家庭教師のアルバイト、学生時代からつづいてるのやな」
- 「学生時代の小遣いは」
- 「一万五千円で足りたか」
- 「質屋だけでなしに、サラ金にもいったやろ」
- 「このごろはどうやねん」
- 「サラ金の領収証が捨ててあったで」
- 「いまの月収なんぼや」
- 「いや、な、心配したてるねんで。ヨメハンももらわなアカンやろし」
- 「ずっとアルバイトでやっていくつもりかいな」
- 「古本屋やりたいんか。あれは許可をうけんとアカンこと知っとるか」

▼ 窓の向う、冬空の下にひろがる街の景色が、限りなく遠かな世界にみえる。

▼ 「一体こんなことで、自分は何をしてるんやろ」としきりに考え込んでいると、まわり一面、白いもやのようにけむってきて、カメラヤマの声がだんだん遠くなる…

▼ 「そうか、古本屋はビニ本やウラ本を売らんと成り立たへんのか。」「そうや。ウラ本はもうかるけど手入れがある。またワシが口をきいたる…」

▼ と、カメラヤマが、机の上へさっきの紙袋の中味をさかさにしてぶちまけた。ビラや印刷物など…、ヒモで束ねた一つは、昨年春頃がサがあつてはと、公園のゴミ焼き場へ捨てた不用のパンフ類だった。その中に「東ア」のものもまじっている…

- 「これ見覚えないか」
- 「これを、拾得物いうことになっとるねんけど、きみのもんやろ」
- 「なんで捨てたんや」
- 「いや捨ててイカンことないけど、」
- 「と、処分してもエエのやな」
- 「そしたら、ここに、放棄の署名をしといてんか」
- 「そらイヤなら、書かんでもエエけどな」
- 「ただ手続きだけのことや」
- 「それで今日はもう終りにしよ」
- 「そない言うなら、ま、書かんでもエエワ」
- 「あ、そや、この写真にうつってるのなア、誰々や、わかるか」

● 後ろ向きのこれ、ムカイやろ。その横のこれは？」

- 「これ、つゆき小屋の入口やな」
- 「荷物をさげて立話してるこの二人は…」
- 「そうか、よっしや。おつ、もう二時や」
- 「長いこと、こころーさん。それではな、日を改めよか。こんな写真何枚か、みてほしいわん」
- 「協力してくれるやろ」
- 「スズキくんには絶対迷惑かけへん」
- 「家の人にもわからんようにする」
- 「こんどは喫茶店で、30分ぐらいや」
- 「来週ぐらいに電話するさかい」
- 「そや、ひるめしたべて帰ってんか。いまドンブリとらせるさかい」
- 「ま、ええや。車で送ったるがな」
- 「ワシが出すんや。遠慮せんでもええ」
- 「そうか、ほんならな。また電話するよ、たのむで」

★ カメラヤマが「東アジア反日武装戦線の一員やろ」と、私にきめつけたのは、路上での一回きりだったことに、その時やと気付いた。つまり彼らは最初から、すこしもそうと思っはなかつたのだ。

★ 調べをつづけながら、途中でカメラヤマは三回も、「もうちょっとで終りにする」と云った。とたんに私は「はよ帰りたい」というおもいで、全身がぐらぐらした。だがかよく考えると、カメラヤマにきくことがなくならぬかぎり、「もうちょっと」は、決して終らぬということだった。しかし又それは、私からも聞くことがカメラヤマになくなったとき、私を帰す以外にないという意味をもつものでもあった。「もうちょっと」は、「早く終る」のぞみとしてでなく、「終ったら帰れる」こととして、状況判断すべきことだった。

★ カメラヤマは、帰りがける私の前に立ちふさがって、「めし」と「車でおくる」をしつこく、くりかえした。めしをたべさせようと、戸口までの数歩の間、卑屈なまでに、親しげな口ぶりになった。

カメラヤマの私に対するよび方が、「おまえ」「きみ」そしていつのまにか「スズキくん」となっていたのと同様に、それはスバイ工作のはじまりだったにちがいない。

▼ 戸口でふりかえると、カメラヤマの坐った机の前に、紙が一枚、ひろげたまま置き去りになっていた。●や△や斜線のラクガキだけの白紙だった。

と、あともどりしてきたカメラヤマが、無雑作にグシャッとつかんで、ぼいとクズ籠に投げた。命中せず、弾かれて遠くへ転った。カメラヤマは、もうそれに構わず、忽然として消えた…

余るは



▼ この詩は、S君の話と手紙に基き、発表前からぼんやりと筆を走りまわったもの。コエエス44のうたに発表された。

▼ 詩集発行以後、日最初の作。かき終つて以前と比べて、すつとりのびりのび詩がかけるようになった。これらは、これら詩集を出版したあかつきのこと。

▼ 六月十二日(日)から又、大山へ直来りつたり。